博士論文「『詩經』圖譜の基礎的研究――圖譜の繼承と展開――」概要

原田　信

本研究では、宋代から中華民國初期までの書物に見える『詩經』圖譜に着目し、これらの圖譜が『詩經』註釋として擔った役割を檢討するため、『詩經』圖譜の内容が改編を重ねつつ繼承されていく經緯と背景を考察した。

『詩經』圖譜は註釋として異質な存在である。歴代の學者は『詩經』の編纂意圖や篇章の構成、時代背景、語彙や用字、詩篇に詠み込まれた諸制度、自然現象など様々な面から『詩經』の解釋を試み、自己の見解を註釋として世に示した。一方、『詩經』圖譜の内容は長期に渡って類似しており、いわば獨自性に缺けた註釋であった。しかし、この點は『詩經』圖譜の註釋としての價値を否定するものではない。長い間存在したことは、圖譜が何かしらの必要性によって編纂され、參照され續けたことを意味している。このため、筆者は圖譜の考察を通じて『詩經』註釋史の新たな一面を明らかにできるのではないかと考えた。

『詩經』圖譜が註釋として擔った役割を檢討する上で、まず問題となるのは『詩經』圖譜を取り上げる研究がこれまでほとんど存在しなかったことである。近年、中國において數篇の論文が発表されたが、それらは特定の時期や限られた種類の『詩經』圖譜を對象とした論考であった。

そこで、本研究ではまず漢代から中華民國初期までの『詩經』圖譜の編纂者と編纂目的、内容の概略を整理して、時代ごとの『詩經』圖譜の特色を指摘し、同時に各圖譜をその類似性によって辨別した。

次に、類似する『詩經』圖譜のなかでも早期の南宋「毛詩正變指南圖」を『詩經』圖譜の原型の形成段階と位置づけ、この後に南宋の書肆が「毛詩正變指南圖」に基づき新たな圖譜を刊刻し、さらに元代に至り南宋の各圖譜によって再び新たな『詩經』圖譜が編纂された狀況を多様化の段階と位置づけ、それぞれの段階における『詩經』圖譜の収錄内容によって個々の圖譜の編纂、改編狀況を比較し、そこに見られる特徴を指摘した。

そして、宋元の『詩經』圖譜が改編されて明清の『詩經』勅撰書に収錄され、これが普及した狀況を『詩經』圖譜の定型化の段階と位置づけ、その編纂と改編の經緯を考察した。また、圖譜の定型化と同時に、明清期には宋元の『詩經』圖解が飜刻され

たり、從來の『詩經』圖譜が改編されたりした。この飜刻や改編の内容と實態を分析し、勅撰書に收錄された『詩經』圖譜の普及との關係性、そして宋元『詩經』圖譜に對する認識の變化との關係性をあわせて考察した。

これに續けて、南宋の「毛詩正變指南圖」を原型とする『詩經』圖譜の内容が、清代の畫家や考證學者が新たに編纂した『詩經』圖譜に收錄された狀況、そして清末になり動植物圖を收錄した岡元鳳『毛詩品物圖考』が廣まる一方で、「毛詩正變指南圖」以來、改編を重ねながら繼承されてきた『詩經』圖譜の内容が次第に失われていく過程の二點について、『詩經』圖譜に對する意識の變化から考察した。

最後に、これまでの考察結果を踏まえて、類似した『詩經』圖譜が長期にわたって存在した原因と『詩經』圖譜が『詩經』の註釋として擔った役割を檢討し、あわせて『詩經』圖譜研究の今後の展望を記した。

以下では、右記の考察過程およびその結果を章節ごとにまとめた。

第一章　『詩經』圖譜の形成と多様化

第一章では、漢代から中華民國初期までの『詩經』圖譜の概要を時代ごとに整理し、傳存の有無、收錄内容や出版形態、編纂者や編纂目的の概要を整理し、そこから導き出される傾向と特色を分析した。

第一節　漢代から北宋までの『詩經』圖譜

ほぼ散佚した北宋以前の『詩經』圖譜二十種の内容や編纂について、その名稱や諸書の記載を手がかりに考察、整理したところ、この時期の圖譜には「圖」と「譜」の二種類が存在していた。「譜」は歐陽脩に輯佚され傳わった鄭玄『鄭氏詩譜』の内容からして『詩經』各詩篇の年代考證のために編纂されたようだが、「圖」は『詩經』を解釋する上でどこまで參照されたのか、明らかではなかった。

第二節　南宋の『詩經』圖譜

南宋の時に編纂された九種の『詩經』圖譜を考察したところ、この時期の『詩經』圖譜には個人が『詩經』の年代、構成などの考證結果を示した「譜」があるのに對して、楊甲「毛詩正變指南圖」は歐陽脩『鄭氏詩譜』や天文や地理、建築や土地などの制度、車馬や衣冠、祭器といった個々の事物の「圖」や「譜」を總合的に收錄した『詩經』圖譜であった。「毛詩正變指南圖」は『詩經』學習の參考資料として人氣を博

し、類似した内容の圖譜が書肆刊刻の學習用テキスト「纂圖互註本」にも収録された。

第三節　元代の『詩經』圖譜

元代の『詩經』圖譜八種を考察したところ、元代には南宋の時と同様「譜」があった一方、『六經圖碑』や羅復の「詩傳圖」など、「毛詩正變指南圖」と同じく總合的な『詩經』圖譜が存在していた。この種の圖譜は學習のために編纂された書物に見られ、「毛詩正變指南圖」と南宋の書肆兩方の圖譜の内容を収録するほか、朱熹の學說の廣まりを受けて、新たに朱熹の言說を圖示した圖譜や解說が加わった。

第四節　明代の『詩經』圖譜

明代に編纂、飜刻された二十一種の『詩經』圖解を考察したところ、明代では『詩經』勅撰書に圖譜が収録され、『詩經』圖譜が初めて標準的な參考資料として全國に普及した。このため、明代の圖譜の多くは、勅撰書の附錄「詩經大全圖」が占めていた。しかし、明代中後期になると南宋の「毛詩正變指南圖」や元代の『六經圖碑』が飜刻され始め、これらは坊本にも収錄され廣まっていった。

第五節　清代から中華民國期までの『詩經』圖譜

この時期の『詩經』圖譜二十八種を考察したところ、清代では、それまで見られなかった情景畫や動植物圖を収錄する『詩經』圖譜がわずかに編纂された。しかし、最も多いのは勅撰書や舉業書の附錄、宋元明『詩經』圖譜の飜刻であった。これらのなかで、從前の圖譜の内容をそのまま踏襲したのは一部の飜刻だけであり、多くは從前の『詩經』圖譜を改編していた。そして、光緒年間から中華民國初期にかけては、宋元の『詩經』圖譜と類似する圖譜が減少する一方、日本の岡元鳳が編纂した『毛詩品物圖攷』が飜刻され、あるいは『詩經』坊本の附錄として収錄されて急速に廣まった。

第一章において明らかとなった事柄の中で、『詩經』圖譜の類似性に關わる特色としては、北宋以前と南宋以後の『詩經』圖譜の間に、ほとんど關聯性が見られない點が舉げられる。これは、南宋以降の『詩經』圖譜の原型が現存する早期の圖譜『鄭氏詩譜』や、同圖譜を収錄した南宋の楊甲「毛詩正變指南圖」であったことを示している。

次に、南宋以降の『詩經』圖譜の内容や編纂者、編纂目的には、時代ごとに異なる傾向があったことが擧げられる。収録内容では、『詩經』の詩篇の作成年代等を示す「譜」と、天文、制度、器物等を示した「圖」が多く、情景や動植物を示した圖譜は、清代以降に初めて編纂された。編纂者では、概ね個人と書肆、國家であった。個人は南宋以降一貫して主要な編纂者であったのに對し、書肆による圖譜の編纂は南宋、明末清初、そして清末に多く見られた。また、國家による『詩經』圖譜の編纂は明、清の二代で行われた。編纂目的は概ね三點、『詩經』學習の參考資料、翻刻による流傳の少ない圖譜の普及、そして『詩經』解釋に關する自說を示すことが擧げられる。南宋以降顯著に見られるのは前二者であった。

結果として、南宋以降の書物に見える圖譜の多くが類似する背景には、南宋の楊甲「毛詩正變指南圖」が登場して以降、個人や書肆、國家のそれぞれが「毛詩正變指南圖」を原型とする『詩經』圖譜の編纂に關與し、改編を繰り返していくという流れがあったと推測された。

第二章　『詩經』圖譜の形成と多様化

本章では、北宋の歐陽脩『鄭氏詩譜』と南宋の楊甲「毛詩正變指南圖」の編纂を『詩經』圖譜の形成と位置づけるとともに、「毛詩正變指南圖」を改編した南宋書肆の『詩經』圖譜や、これらを更に改編した元代の『詩經』圖譜の編纂を『詩經』圖譜の多様化と位置づけ、類似する『詩經』圖譜の原型が形作られ、さらに多様化していく過程を考察した。

第一節　宋代における『詩經』圖譜の形成

『詩經』圖譜の形成を明らかにする上で、まず後漢の鄭玄が自身の『毛詩』解釋を示すため、『史記』と『春秋』の記載によって『毛詩譜』を編纂したこと、そして同圖譜が早くに散佚し、北宋の時に歐陽脩が『毛詩譜』の殘卷や『春秋』、『史記』などの諸資料によって『鄭氏詩譜』を輯佚した經緯を整理した。次に、楊甲の「毛詩正變指南圖」を考察した。同圖は七割が天文地理や制度、車馬などの「圖」、三割が『詩經』詩篇の名稱や動植物や器物などの「譜」であった。複數の明らかな典據により、楊甲は『毛詩正義』のほか、欧陽脩の『鄭氏詩譜』や『詩本義』、蘇轍『詩集傳』、北宋の聶崇義『三禮圖』、陳祥道『禮書』といった禮圖、唐の呂才や北宋の燕肅の漏刻圖など、主に唐や北宋の諸書に基づき「毛詩正變指南圖」を編纂したことを指摘した。

第二節　宋元における『詩經』圖譜の多様化

『詩經』圖譜の多様化を明らかにするため、南宋の書肆と元代の人々が編纂した『詩經』圖譜の内容を編纂年代の順に分析した。南宋では、早期に編纂された『監本纂圖互註重言重意互註毛詩』の附錄「毛詩圖譜」及び「四詩傳授之圖」は、「毛詩正變指南圖」を節錄したと考えられる。その後の單行本『毛詩圖說』は「毛詩正變指南圖」中の圖譜を複數收錄しており、『纂圖互註毛詩』の附錄「毛詩舉要圖」は主に『毛詩圖說』に依據し、「毛詩正變指南圖」の内容を補うことで編纂されたと考えられる。『毛詩圖說』や「毛詩舉要圖」は他の圖譜を節錄するだけではなく、歐陽脩の『詩經』解釋やそれを示した圖譜、陸佃『禮象』や王普の漏刻圖、李樗『毛詩解』などによって、從前の圖譜を改編していた。

元代では、地理圖のみを收錄した書物や、「譜」と「圖」を複數收錄した圖譜が見られる。なかでも多くの種類の圖譜を收錄するのは『六經圖碑』と羅復『詩集傳名物鈔音釋纂輯』の附錄「詩傳圖」であり、兩圖譜には南宋の「毛詩正變指南圖」、書肆の『毛詩圖說』と「毛詩舉要圖」の圖譜の一部が收錄されていた。このうち「毛詩正變指南圖」の圖譜はわずかであり、主體は南宋の書肆の圖譜であった。これに加えて、羅復「詩傳圖」では、『六經圖碑』との共通點も見られた。一方、『六經圖碑』や羅復「詩傳圖」では解說が改編されて朱熹の註釋が主體となり、『六經圖碑』では朱熹の『詩經』に關する言說を示した圖譜も增補された。このほか、劉瑾『詩集傳音釋』の附錄「諸國世次圖」と「作詩時世圖」は、南宋の「毛詩正變指南圖」や『毛詩圖說』の兩方の特徵を兼ね備えており、この兩圖譜に依據した可能性が高いことが明らかとなった。

第二章で考察した『詩經』圖譜の形成と多様化は、楊甲「毛詩正變指南圖」好評を博して各地で刊刻され普及し、南宋の書肆がこれを改編することで始まった。

元代では「毛詩正變指南圖」から派生した南宋書肆の『詩經』圖譜に對して、當時廣く行われた朱熹の『詩經』註釋に依據して改編を加えることで新たな『詩經』圖譜が編纂された。こうして、南宋の『詩經』圖譜はさらに多様化した。この一方、多様化の過程では「毛詩正變指南圖」の「譜」が省かれ、南宋時に採錄されていた『毛詩正義』や北宋諸家の『詩經』解釋が朱熹の言說に改められるなど、「毛詩正變指南圖」の内容は次第に失われていった。

第三章　『詩經』圖譜の定型化と改編

本章では、明清の時に『詩經』の標準的解釋を示す書物とされた勅撰書の圖譜の編纂と普及を『詩經』圖譜定型化の過程と位置づけ、この種の圖譜の編纂過程と内容上の特徴を考察した。一方、この時期には『詩經』圖譜の改編も行われた。そこで、定型化と改編という對照的な事象が明清に発生した原因を明らかにするため、該當する『詩經』圖譜の内容と編纂、改編の經緯を分析し、その異同を比較した。また、改編された圖譜のなかでも、宋元『詩經』圖譜の飜刻では、編者不明の『六經圖碑』をめぐって認識の變化が見られた。この點は、宋元『詩經』圖譜の改編と關わりがあるため、あわせて考察した。

第一節　明代における定型の確立

永樂帝の時に編纂された勅撰書『詩經大全』の凡例に、「詩經大全圖」は元代の羅復と劉瑾の圖譜を収録したとある。「詩經大全圖」、すなわち羅復と劉瑾の圖譜の内容を改めて分析すると、典據の明らかな箇所は一七三箇所あった。このうち、個人の言説では朱熹に關する文獻が最も多く引用されている。さらに、朱熹の思想や『詩經』解釋を示した圖譜が収録されており、「詩經大全圖」は全體的に朱熹の思想が色濃く反映された圖譜であった。また、『詩經大全』の編者胡廣が羅復と劉瑾の圖譜をそのまま収録した背景には、明が元の制度を踏襲し、科舉のなかで朱熹『詩集傳』を標準的解釋としたことがある。そして、編纂者の胡廣が羅復や劉瑾と近い地域の出身であったことも、特に兩者の編纂した圖譜を収録したことと關係があったかと推測された。

第二節　清代における定型の改編

定型となった『詩經』圖譜の改編を考察するため、清代の勅撰書『欽定詩經傳說匯纂』の附錄「詩傳圖」の内容を分析し、明代の「詩經大全圖」と比較した。結果として、引用典據と圖の同一性から、「詩傳圖」は「詩經大全圖」の解說のみを改編した圖解であった。「詩傳圖」の引用は、唐以前の註釋が最も多く、陳祥道が大部分を占める北宋の註釋と、朱熹に代表される南宋の註釋がこれに次いだ。この改編は、『欽定詩經傳說匯纂』の編纂方針、すなわち朱熹を主としつつ、朱熹の說に合致する、あるいは『詩經』の主旨を補う解釋は廣く採錄するという編纂態度に由來していた。一方、圖については「三代の舊」を傳えているという理由から改編されなかった。

以上のように、明清の勅撰書の『詩經』圖譜は、直接的には元代の羅復と劉瑾の編纂

した圖解に由來しており、結局は南宋の「毛詩正變指南圖」が改編を重ねた一聯の流れの中から生まれた『詩經』圖譜であった。清では、明との學術氣風の違いから解說は改編されたが、圖は改編されなかった。「詩傳圖」が「詩經大全圖」に依據している以上、「詩傳圖」の編者は、それが羅復と劉瑾の圖解だと知っていたはずである。しかし、それが何に由來するのか、恐らく明らかではなかったのだろう。この原因は、宋元における『詩經』圖譜の度重なる改編に求められるのだが、「詩傳圖」の編者は、古くから傳わる圖に何かしらの根據があるとして改編しなかったと考えられる。

第三節　明代における改編

明代における改編では、まず圖譜の內容を改編した胡賓「詩經圖全集」と張溥『詩經註疏大全合纂』を分析した。前者は元代の『六經圖碑』と明の「詩經大全圖」を折衷しており、後者は「詩經大全圖」に南宋の「毛詩正變指南圖」の一圖を增補したものであった。また、形態面の改編では、盧謙、章達による『六經圖碑』の「詩經圖」の飜刻を分析した。『六經圖碑』は碑の二面に樣々な圖譜が刻まれているため、書物とする際には圖譜の順序を決定する必要がある。この點について、盧謙と章達は「詩經大全圖」の構成に基づいたと推測された。このように、明代における改編の背景には「詩經大全圖」や「毛詩正變指南圖」の普及が影響していたと考えられる。

第四節　清代における改編

清代における改編については、舉業書の附錄と宋、元、明の『詩經』圖譜の飜刻を考察した。舉業書の附錄のなかでも、清代早期に編纂された姜文燦「深柳堂詩經圖考」は南宋の「毛詩正變指南圖」や明の「詩經大全圖」を折衷した上で『白虎通義』や『六家詩名物疏』など諸書の解說や典據未詳の天文圖を加えるなど、從來の圖譜を大幅に改編していた。この後の趙燦英「詩經圖考」は恐らく刊刻費用の節約等の原因から「深柳堂詩經圖考」の一部を削除したものであり、高朝瓔『詩經體註圖考』は「詩經大全圖」の圖のみを採錄し、上圖下文の體裁をとった初めての『詩經』圖譜であった。

一方、飜刻では南宋の「毛詩正變指南圖」と元の『六經圖碑』の「詩經圖」を折衷したり、新たな天文圖を加えたりするといった改編が行われた。『欽定詩經傳說匯纂』の刊刻前に『六經圖碑』を飜刻した盧雲英は明の「詩經大全圖」から解說を增補しているのに對して、『欽定詩經傳說匯纂』より後の王皜「毛詩正變指南圖」、鄭之僑「詩經圖」、楊魁植「詩經圖」では『欽定詩經傳說匯纂』に依據して增補、改編する傾向が強まり、

「詩經大全圖」の要素は次第に失われた。このことから、清代の『詩經』圖譜の改編に特に影響を與えたのは、『詩經』勅撰書の圖譜の普及であったと考えられる。

第五節　宋元の經書圖譜に對する認識の變化

本節では初めに、清代でも早期に『六經圖碑』を飜刻した江爲龍『朱子六經圖』の編纂經緯より、康熙年間中後期までに『六經圖碑』の編者を朱熹とする說があり、このために改編が行われなかったことを指摘した。次に、雍正年間の常定遠『六經圖碑』や盧雲英『五經圖』の序に見える、宋元の經書圖譜に對する疑義を考察した。疑義が抱かれた背景には、翻刻により宋元の經書圖譜が廣まるにつれて、各圖譜の異同が認識され、特に編纂者の不明な『六經圖碑』の編者や編纂年代が問題となったことを指摘した。

次に、乾隆年間の飜刻本である王皜『六經圖定本』、鄭之僑『六經圖』、楊魁植『九經圖』の宋元の經書圖解に對する意識を考察した。これらの編者は、南宋『六經圖』と元代『六經圖碑』の間に存在する異同や『六經圖碑』の編者が不明な理由を時系列で捉えて『六經圖碑』を最も古い圖譜と見なし、これが飜刻されて『六經圖』となり、次第に『六經圖碑』の内容が失われていったと考えるようになり、同時に、失われたと仮定された内容を他の經書圖譜によって增補しようとした。この認識の変化は、『詩經』圖譜の改編を推進した要因の一つだと考えられる。

第四章　宋元『詩經』圖譜の影響と消失

本章では、南宋の「毛詩正變指南圖」を原型とする『詩經』圖譜が、これを原型としない『詩經』圖譜に與えた影響、そして「毛詩正變指南圖」以來の『詩經』圖解の内容が次第に書物から消失していく經緯を考察した。

第一節　宋元『詩經』圖譜の影響

宋元『詩經』圖譜が後世へ與えた影響を考察するため、明代の類書である鐘惺『詩經圖史合考』と、清代の『詩經』圖譜のなかでも情景畫を收錄した高儕鶴『詩經圖譜慧解』、動植物圖を收錄した徐鼎『毛詩名物圖說』、『詩經』の考證書である方玉潤『詩經原始』を取り上げ、これらの書物における宋元以來の『詩經』圖譜の收錄狀況と引用態度を考察した。この結果、高儕鶴や徐鼎、方玉潤は、それぞれ依據した『詩經』圖譜の内容に不足や疑念を感じており、飜刻の改編で見られた宋元以來の『詩經』圖譜に價値や意義を見出す認識が、清代以降次第に崩れゆきつつあったことを明らかにした。

第二節　宋元以來の『詩經』圖譜の消失

本節では、光緒年間以降の『詩經』圖譜を宋元以來の『詩經』圖譜を收錄するもの、情景畫や動植物圖を收錄するもの、動植物圖のみを收錄するものの三種に區分し、それぞれの收錄狀況を考察した。この時期の『詩經』圖譜の多くは『詩經』坊本の附錄であり、樣々な圖解を收錄した理由は明らかでないものの、情景畫や動植物圖の收錄は商業出版物に新機軸を打ち出すという、書肆の工夫であったと推測される。一方、鄭之僑「詩經圖」を節錄する坊本もあった。同圖はこれまで坊本の附錄には引用されることのなかった圖譜であり、これも書肆の工夫であったのだろう。しかし、その內容は元代の『六經圖碑』に『欽定詩經傳說匯纂』の解說を加えただけであり、宋元以來の『詩經』圖譜の枠組みを超えるものではなかった。恐らくはこのために、新たに『毛詩品物圖攷』が人氣を博し多くの『詩經』坊本の附錄に收錄されたのに對して、宋元以來の『詩經』圖譜の內容を伝える鄭之僑「詩經圖」に依據した圖譜は數量、種類ともに減少し、民國初頭にはほとんど見られなくなったと考えられる。

結語

結語では初めに、本論で考察してきた結果を整理するとともに、歷代類似した『詩經』圖譜が多く編纂された背景として三點の原因を指摘した。第一點は、『詩經』圖譜の繼承と展開には「毛詩正變指南圖」を原型とする『詩經』圖譜が改編を重ね、その間に前代の飜刻が加わり、さらに新たな圖譜が生み出されるという多重的な再生產の構造が存在していたことである。第二點は、『詩經』圖譜の繼承の過程において、次第に過去の圖譜の編者が忘れられていったことである。『詩經』圖譜に見出された價値はその根據や來歷よりも、編者が不明ながら古くより傳わったことにあった。このため、古いものに價値を見出す風潮のなかで、宋元以來の『詩經』圖譜の內容は、改編されながらも繼承された。しかし、『毛詩品物圖攷』という新たな『詩經』圖譜の登場によって、それは急速に失われたのである。そして第三點は、類似した『詩經』圖譜の多くが學習の參照資料として編纂、飜刻されたものであったことである。このため、『詩經』圖譜はその時々の學術思潮の動向を受けて改編されたが、學習對象となるほど廣く受けいれられた註釋はそれほど多くはなかったことから、『詩經』圖譜も大きく變化することはなかったのである。

次に、『詩經』圖譜が註釋として擔った役割と、本研究の今後の展望を合わせて記し

た。『詩經』圖譜が擔った役割は、學習用の參照資料として學ぶべき内容を廣く傳えることだった。このため『詩經』圖譜は擧業書等の内容と合わせて檢討することで、新たな解釋の積み重ねの歴史とは異なる、學習に關わる註釋史を構築することができ、さらに教育や學習の實態を解明する手がかりともなるだろう。また、『詩經』圖譜は日本でも江戸時代に編纂されており、中國の圖譜の影響を受けたもののみならず、中國では極めて少ない動植物の圖譜が多數ある。日中の『詩經』圖譜を比較することで、兩國の學術風土の違い、そして學術交流の一端を解明できるのではないかと考えられる。